

## 「大学生ボランティアによる被災児童生徒個別支援プログラム」事業

### 被災して、勉強ができなくなった子どもたちに、 将来の夢を抱き、実現する機会を!

阪神淡路大震災を契機として、関西学院大学の学生らが、被災した子どもたちの学習支援をボランティアで始めた。今、その組織は一般社団法人となり、新たなシステムを構築しながら東日本へと拡大。貧困家庭の子どもたちや東日本大震災で被災した子どもたちの救済に日々、取り組んでいる。

#### バウチャーとブラザー・シスター制度が 支援の両輪

日本では世帯間の貧富の差が拡大している。そして、世帯収入はそのまま子どもの学力にも影響するというデータもある。

こうした背景のなか、被災児や貧困家庭の子どもたちを支援するために活動しているのが、一般社団法人チャンス・フォー・チルドレンである。

実際の支援のしくみは次のようになる(図1参照)。①同法人が個人・企業から寄付金を募る。②寄付金を元にバウチャー(クーポン)取扱い事業者(学習塾や習い事教室など)の支払いに使用できるバウチャーを対象の子どもに提供する。③子どもがバウチャーを使用する。④同法人と事業者との間で精算する。提供されるバウチャーは一人あたり、年間25万円相当で、使用目的は教育サービスに限定されるが、バウチャーの使用料を事業者に支払うことで、結果的に被災地の学校外教育関連機関の支援や雇用にもつながっている。

同法人・代表理事・雑賀雄太さんに話を聞いた。  
「すべての子どもたちに夢を持ってもらい、実現に向けて歩んで欲しいという思いで行っています。学校の勉強

だけではなく、スポーツや習い事、体験活動などにも使用できます」

経済的な支援ばかりではない。子どもたちの相談役として、ボランティアの大学生がサポートする制度を取り入れている。

「ブラザー・シスターと言います。バウチャー利用者は毎月、ブラザー・シスターと電話や面談で話をします。悩みや進路相談など、内容はさまざまですが、人生の少し先を歩んでいる大学生ですので、子どもたちも親しみをもってくれるのです」

ブラザー・シスターになるには、対人援助やコミュニケーション、進路・学習などに関する研修を専門家から受ける必要がある。その後も2ヵ月に1度は定期研修に参加して、スキルを磨く。

もっとも重視されるのはコミュニケーション能力だ。被災児は各地に散在しているため、多くは電話でのやりとりになるが、それで信頼関係を築かなければならない。ま



クーポン贈呈式の様子

子どもたちはバウチャー(クーポン)を利用して幅広い教育サービスを受けることができる



図1 同法人では、市民・企業などの寄付金をもとにバウチャー(クーポン)を発行し、経済的な理由で学校外教育を十分に受けられない子どもたちに提供している



ブラザー・シスター(大学生ボランティア)は定期的に研修を行う

た感受性豊かな相手だけに「自分の言ったことが影響を与えすぎないか」などにも気をを使う。大学生にとっても貴重な人生経験の場になっている。これまで養成したブラザー・シスターはのべ60人以上、現時点で40名が子どもたちに対応している。

#### 震災のなかでも、 将来に夢を抱く子どもたち

同法人は東日本大震災後、被災した子どもへの支援を強化した。

ある子は自宅を流され勉強する環境をなくした。ある子は親が失業し、進学が危うくなった。震災は子どもたちの進路にも影を落とす。

しかし、避難所での体験から、保育士になるという夢を見いだした子もいる。こうした子どもたち、特に受験期を迎える子どもを優先して支援の選考にあたった。今年度、支援できたのは200名。応募総数は1701名。まだまだ支援の手は行き届かない。

それでも今年度のバウチャー利用者のうち、中学3年生41名はすべて進学し、高校3年生は84.5%が進学するという実績を残している。

「ほとんどの子の家が全壊、または半壊というなかで、本当にがんばったんだということがわかります」と雑賀さん。

#### 担当者より



ブラザー・シスター養成をサポートしていただきました。

一般社団法人  
チャンス・フォー・チルドレン  
代表理事  
雑賀雄太さん

今回AJOSCの助成を受けて、研修会やフォローアップに力をいれることができ、より多くの優秀なブラザー・シスターを養成できました。子どもたちを直接サポートする彼ら、彼女らの成長が子どもたちへのより良い支援に繋がったと思います。ありがとうございました。

バウチャーを利用した岩手県の中学2年生は次のように感想を寄せた。

「今の僕の学力ではまだ無理かもしれないけれど、公務員になれるように勉強を頑張りたいです。もしもなれたら、町の復興につながるような仕事をして、早く町に前のような明るさが戻るようにしたいです」

チャンス・フォー・チルドレンの活動は、次第に協力者を増やしている。真摯な活動と共に、寄付者へ明瞭な会計・活動報告を行っていることやバウチャーのような新しい制度を取り入れていることも好感を持たれている。雑賀さんらが学生時代に、数名で街頭募金活動を始めた当初からみれば格段の進歩だ。とはいえ、ニーズを満たすにはまったく足りない。もっと広く、もっと多くの子どもたちに援助が届くように、同法人のチャレンジは今日も続いている。



ブラザー・シスターによる面談も行う Photo by Natsuki Yasuda/studio AFTERMODE